

泉大津市文化財調査概要 5

豊中遺跡発掘調査概要 IV

1980.3

泉大津市教育委員会



泉大津市文化財調査概要5

豊中遺跡発掘調査概要IV

1980.3

泉大津市教育委員会

例 言

1. 本概要報告書は、泉大津市教育委員会が、泉大津市内に所在する豊中遺跡の範囲内において、開発行為に先立って実施した発掘調査記録である。
2. 本調査は、泉大津市が国庫補助事業および大阪府補助事業（総額 5,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画・実施したものである。
3. 本調査は下記の構成で実施した。

調査主体者 泉大津市教育委員会教育長 中辻捨二郎

調査担当者 泉大津市教育委員会社会教育課 坂口昌男

調査員 佐藤正則

調査補助員 岩城 -

事務局 泉大津市教育委員会社会教育課(課長 鈴木 実)

4. 本調査は、昭和54年度事業として、昭和54年6月1日に着手し、昭和55年3月31日に完了した。
5. 本書の作成は、坂口・佐藤・楠山享司が分担し、図版作成には太田正康が加わった。
6. 本書では、遺物実測図及び遺物写真に共通する番号を付け、本文でもこの番号を用いた。

目 次

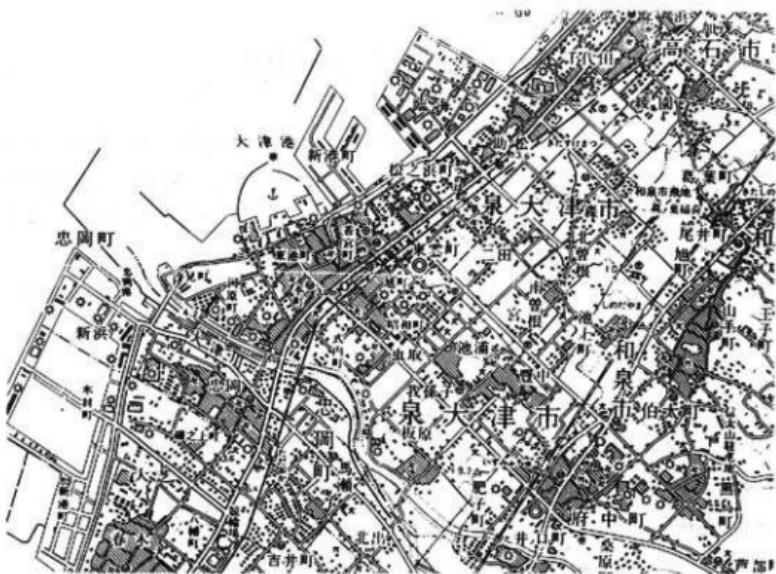
第1章 地理的環境	1
第2章 歴史的環境	2
第3章 調査の概要	7
第1地点－1	7
第1地点－2	10
第2地点	11
第4章 まとめ	21
参考文献	21
遺物観察表	22

挿 図

第1図 泉大津市地形図	1
第2図 遺跡分布図	3
第3図 調査地点図	6
第4図 第1地点－1遺構図	8
第5図 第1地点－1出土遺物	9
第6図 第1地点－2遺構図	10
第7図 第2地点遺構図	12
第8図 第2地点1号住居遺構図	13
第9図 第2地点円形竪穴遺構図	14
第10図 第2地点ピット31出土状態	15
第11図 第2地点河川状遺構断面図	15
第12図 第2地点SD-Ⅲ～Ⅳ断面図	16
第13・14図 第2地点出土遺物	18～19

図 版

- | | |
|---------|------------------|
| 1 | 第1地点 1 全景、竪穴住居 |
| 2 | 第2地点 全景 |
| 3 | 第2地点 1号住居、2号住居 |
| 4 | 第2地点 3号住居、4・5号住居 |
| 5 | 第2地点 门形竪穴 |
| 6 | 第2地点 中世溝 |
| 7 | 第2地点 遺物 |



第1図 泉大津市地形図

「この地図は建設省国土地理院発行の5万分の1の地形図を使用したものである」

第1章 地理的環境

大阪府泉大津市は、大阪平野の南部に位置し、山間部を有せず、西側は大阪湾、北側は高石市、東側は和泉市、南側は大津川を隔てて泉北郡忠岡町と接している。市内西部を海岸線に沿って、国道26号線や大阪臨海線の道路が走り、又私鉄南海電鉄本線も平行し、北より北助松駅、松之浜駅、泉大津駅がある。急行の停車する泉大津駅から大阪難波へは20分と、非常に近距離にある。市街地はこの路線を軸に形成されている。東部は水田地帯が残っているが、第二阪和国道の開通と、土地区画整理の完成により、宅地開発が徐々に進行している。面積は 11.52km²、人口は 68,473人と小規模であるが、府下で7番目に市になるなど、早くから開けていた。産業は織物工業が盛んで、特に毛布の生産高は全国の95%を占めている。近年、堺・泉北臨海工業地帯として、海岸部が埋め立てられ、カーフェリーが発着するなど港湾のまちとしても発展しつつある。市の北東部では、農業の他に観葉植物、特に緑紹竹の栽培が盛んであるが、市域全体が市街化区域となっているため、田園地帯もやがてみられなくなるだろう。

(坂口)

第2章 歴史的環境

和泉地方の平野部の気候は、温暖で降雨量も概して少なく、瀬戸内式気候に属している。そのため、生活の場・生産の場として早くから開けていた。堺市四ツ池遺跡、和泉市池上遺跡はその例である。泉大津市内においても、近年の開発に伴って、豊中遺跡・古池遺跡・要池遺跡・東雲遺跡・七ノ坪遺跡・池浦遺跡・穴田遺跡などの発掘調査が行なわれている。

以下豊中遺跡昭和54年度発掘調査結果報告をするにあたり、周辺の遺跡の大略を時代順に紹介してみる。

旧石器時代

昭和24年に群馬県桐生市岩宿において、洪積層内より旧石器が発見された。岩宿遺跡である。それまで日本には旧石器文化の存在はないと考えられていた。その後、各地において旧石器文化に属する遺物が続々と発見された。

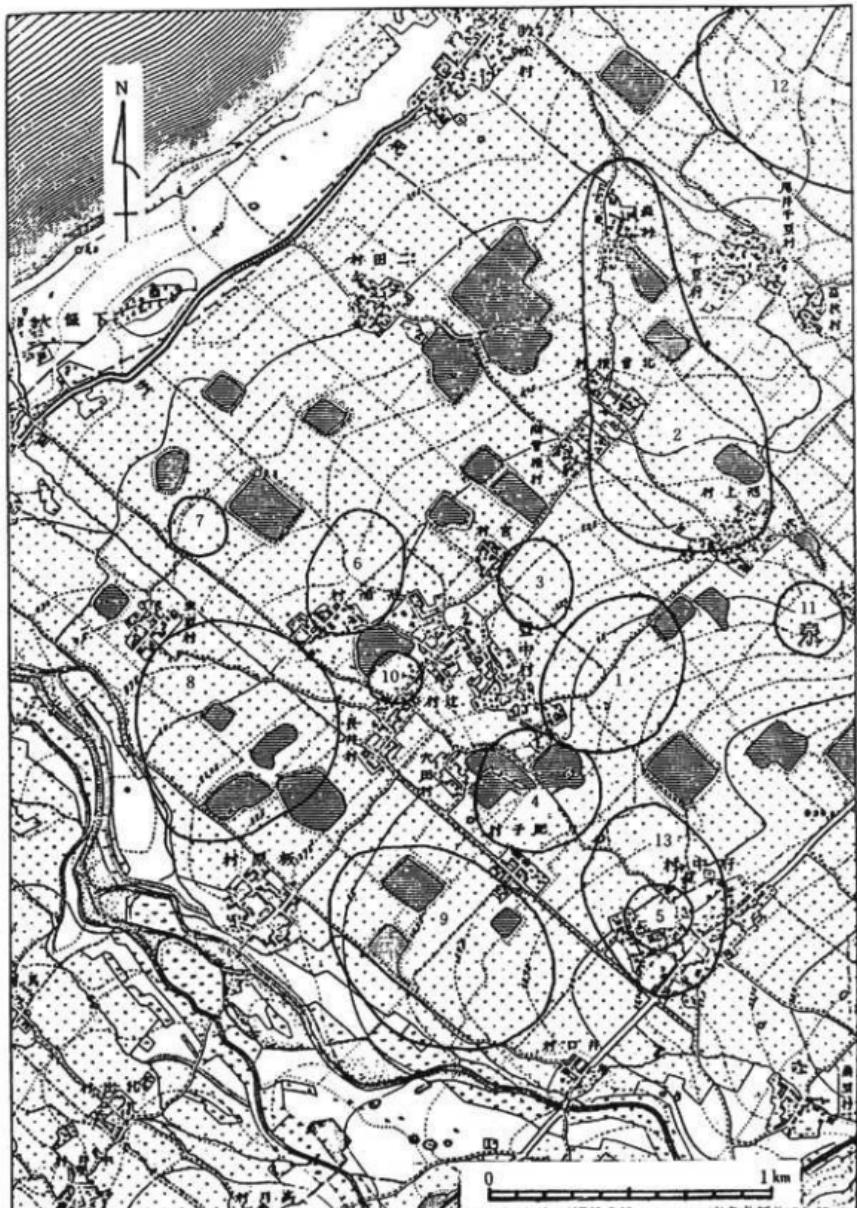
泉大津市内においては、この時代の遺物は発見されていないが、東接する和泉市において、昭和40年に府立泉大津高校の地盤部が、父鬼町の海拔390mの地点でサスカイトの石核および剝片を発掘した。^① 大床遺跡である。また伯太北遺跡から有舌尖頭器とナイフ形石器が出土している。高石市大園遺跡からは後期のナイフ形石器や終末期から縄文時代草創期・早期に見られる有舌尖頭器が1点出土している。^②

縄文時代

日本における最初の土器文化である。泉大津市内においては、この時代の明確な遺構は今のところ発見されていないが、豊中地区に存在した古池・上池は河川を堰止めて造られた池であるため、その底には砂利層が見られ、この河川のベースを形成している砂利層中より縄文時代中期末に属する土器片が出土した。^③ 古池遺跡である。また板原遺跡からも中期末に属する上器片が、炭・灰・焼土を作つて発見された。

和泉市信太山丘陵からは前期打製石匙、府中遺跡から石棒や石礫、伯太北遺跡から中期～後期の土器・池上・曾根遺跡から晩期の土器が出土している。岸和田市や葛城山頂から中期の土器、箕土路遺跡から中期初頭の土器、春木八幡山遺跡から後期の土器が出土している。また堺市四ツ池遺跡からは後期・晩期の土器が出土している。

このように和泉地方において丘陵部や台地上・砂丘などから遺物は発見されているが、明確な



1. 豊中遺跡 2. 池上曾根遺跡 3. 七ノ坪遺跡 4. 古池遺跡 5. 和泉國府跡 6. 池浦遺跡
7. 東雲遺跡 8. 虫取遺跡 9. 板原遺跡 10. 穴師薬師寺跡 11. 伯太北遺跡 12. 大園遺跡 13. 府中遺跡

第2図 遺跡分布図

遺構も検出されていないため、この地方の縄文時代はまだ充分に把握されていないが、次の弥生文化開始の下地は既に出来ていたと考えられる。

弥生時代

北九州に始まった弥生文化は急速に東進し、近畿地方に伝わる。堺市四ツ池遺跡においてより早くうけいれられた。縄文時代晩期の土器に模痕の付いているのが発見され、和泉における最初の米つくりと考えられる。

池浦遺跡は前期中段階に出現した集落であり、低位段丘に位置しており、人工のV字溝が掘られ、住居区を限定していたと思われる。虫取遺跡においても前期の土器が出土している。

泉大津市から和泉市におよぶ池上遺跡（池上・曾根遺跡）も前期中段階・新段階の土器の出土がある。^④ 前期から後期まで発展しながら継続している。特に前期から中期にかけて掘られた人工の溝は集落を囲み、規模の拡大とともに掘り戻され、日本でも有数の弥生時代の集落である。^⑤

古墳時代

高塚墳墓に代表されるこの時期は、4世紀から7世紀までの時期である。古墳を中心に前期・中期・後期に分けられる。前期古墳としては和泉市黄金塚古墳・丸笠古墳、岸和田市摩湯尖山古墳・久米田古墳群である。中期古墳は堺市百舌鳥古墳群、和泉市員吹山古墳、後期古墳としては高石市富木車塚、和泉市信太山千塚、堺市陶器千塚などがあげられる。

泉大津市内には現在のところ古墳は見あたらないが、集落跡としては、豊中遺跡・古池遺跡・七ノ坪遺跡・東雲遺跡があり、遺物散布地としては板原遺跡・虫取遺跡がある。

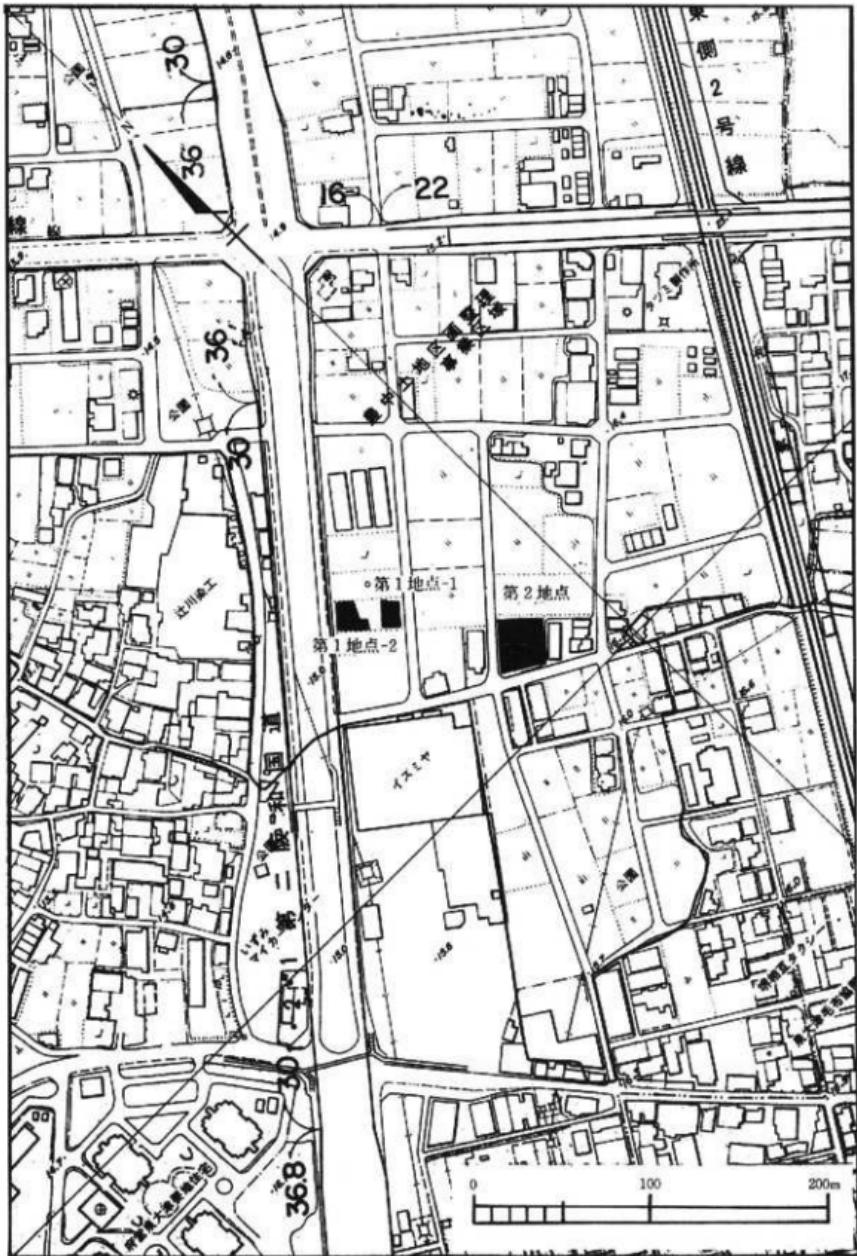
奈良・平安時代

東雲遺跡において孤立建築物が10数棟検出されている。^⑥ 豊中遺跡においては平安時代後期に属する井戸が1基検出され、井戸内より「田井」「田井殿」と高台部内側あるいは体部外面に墨書きされた黒色土器や灰釉陶器・土鍋・土師器等が出土している。^⑦ 豊中遺跡内では「大福寺」の字名が残っており、この頃に寺が建立されたと考えられる。豊中遺跡や穴師薬師寺跡付近から平安時代末以降の瓦が発見されている。穴師薬師寺は宝龜年中に創建されたと伝わっている。また泉穴師神社は白鳳元年の創建である。穴師薬師寺・泉穴師神社を中心にして集落が形成された可能性があり、今後付近の発掘調査により寺院建築遺構や集落跡が検出されると思われる。

中世

豊中遺跡において土釜（羽釜）を使用した羽釜枠井戸^⑧や曲物の使用した曲物枠井戸^⑨が検出されている。おのの中世遺物としての瓦器片や土師質土器片を伴なっている。種々の形態の井戸が発見されているが、明確な建築物跡は確認されていない。古池遺跡においては、鎌倉時代の倉庫跡が発見されている。遺物散布地としては穴山遺跡・穴師神社遺跡・板原遺跡・虫取遺跡があげられる。

(楠山)



第3図 調査地点図

第3章 調査の概要

昭和54年度発掘調査の報告とするのは、豊中遺跡2カ所（第3図）の地点で実施した調査の概要である。以下地点ごとに記述を行う。

第1 地点-1 泉大津市豊中 959-4（第4図）

住宅建設に先立つ調査である。トレンチ調査を実施したところ、耕土下よりピット及び不定形なプランの遺構を確認したため、調査範囲を拡張した。規模は10.5m×16mで164.8m²である。

層序

遺構面は耕上の下層上面であるが、既に盛上工事（70cm）がなされているため、遺構面までは現地表より90cm下ということになる。本来ならば床土が存在するのが一般的であるが、当地点では存在せず、黄色粘質土（遺構面）が床土としての役割を果たしていた。

遺構

検出した遺構は、溝・溝状遺構・竪穴住居・落ち込み遺構・ピットなどである。遺構面が耕土直下であるため、後世に削平を受け、消滅した遺構もあると思われ、遺存度も良好とは言えない。

溝

検出した溝は3条を数え、SD-I・SD-II・SD-IIIとした。

SD-I 検出した溝の中で、切り合いの前後関係から考えて、最も新しい時期のものである。幅35cm～50cm、深さ15cm～30cmを測り、断面はU字形を呈したものである。流路は南から北の方向へのび、途中で浅くなり途切れていた。溝内は灰色砂が堆積しており、遺物は検出されなかった。

SD-II 幅10cm、深さ5cm～12cmを測る。流路は南東から北西方向に走り、北西端で落ち込み遺構に繋がる。SD-Iに途中で切断されていた。暗茶色土が堆積しており、遺物は検出されなかった。

SD-III 幅50cm、深さ20cmの規模で、断面はU字形を呈する。流路は東から西方向に走り、SD-Iに途中で切断され、西端はSD-IIと同様、落ち込み遺構に繋がっていた。溝内は暗茶色土が堆積しており、遺物は検出されなかった。

竪穴住居

調査地東壁付近で検出した。一部分のため全体のプランや規模は不明であるが、形状は方形を呈すると思われる。遺存度は比較的良好で、壁の立ち上りは20cmを測り、壁際には幅5cm、深

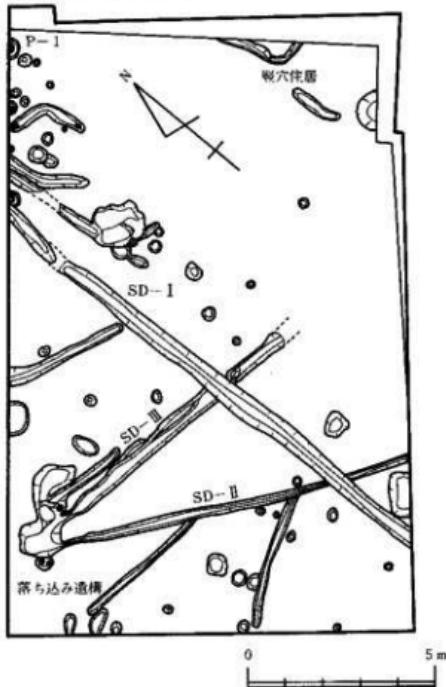
さ5cmの樹溝が確認できた。遺構内には暗茶色土が堆積していた。遺物として、叩き目を施した土師器甕片が堆積土中より、又複合口縁を有する土師器甕片（1）が床面より出土した。

落ち込み遺構

調査地西隅付近で検出した。規模は、縦2.5m、横1.1m、深さ5cm～20cmを測る不整形なプランの遺構である。前述したSD-II・SD-IIIの西端が接続しており、水溜まりの機能を有していたと思われる。遺構内には、暗茶色土が堆積しており、土師器片が多数出土したが、器形を明らかにするものはなかった。

ピット

大小さまざまなものを探出した。その規模は直径20cm～60cm、深さ5cm～30cmを測るものである。散在しており、建物等を復元することはできなかった。暗茶色土が堆積していた。遺物は大半のピットから検出されなかったが、北隅に位置する直径60cm、深さ30cmのピット（P-1）からは、布留式甕片・小型丸底甕（2・3）が出土した。

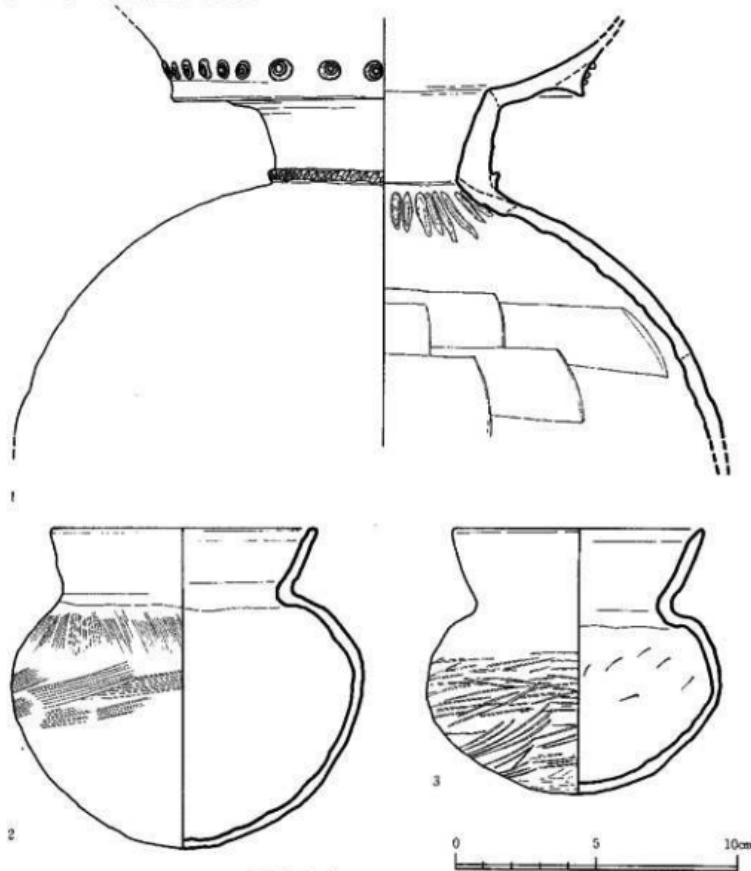


第4図 第1地点-1遺構図

遺物 (第5図)

土師器 (1・2・3)

(1) は二重口縁の蓋で球形の胴部とやや外側にひらく頸部との境には、刻み目を有する凸帯がめぐる。口縁部は頸部よりゆるく内済しながら大きくひらくが、端部は不明である。口縁部中位には断面三角形の凸帯をめぐらせて段をなし、円形浮文を貼りつける。(2・3) は小型丸底壺で、(2) は口縁部が小さく外反し、体部は大きく球形をなす。(3) は口縁部のたちあがりがやや長く外上方にひらき、体部は小さく扁平球である。口縁端部はいずれも丸い。(1・2・3) はともに布留式土器である。



第5図 第1地点-1出土遺物

第 1 地 点 - 2 京大津市豊中 959-4 (第 6 図)

住宅建設に先き立つ調査である。当該地は第 1 地点 - 1 の西方約 5 m に位置する。調査範囲は L 字形で 124m² となる。

層 序

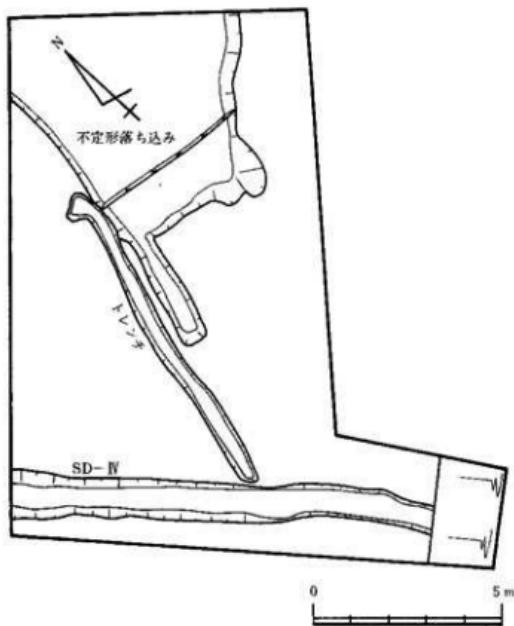
第 1 地点 - 1 と同筆の水田であったため、層序は既述のとおりである。

遺 構

検出した遺構は、溝・不定形落ち込みである。

溝

検出した溝は 1 条であり、SD-W' とした。



第 6 図 第 1 地点 - 2 遺構図

SD-M 調査地の南部分に位置し、南東より北西に流れる溝である。規模は幅70cm～130cm、深さ15cm～20cmを測る。溝内には灰茶色砂質土が堆積しており、10cm大程度の川原石が多数含まれていた。遺物は、瓦・陶磁器片などの細片が出土した。

不定形落ち込み

北側に拡がる幅5cm程の浅い造構である。底部は南で浅く、北へ向かって徐々に深くなっている。高低差は30cmを測る。性格は不明である。堆積土は上部で暗茶色土、下部で暗茶色粘質土が見られた。叩き目を施した土師器片や高杯片などの遺物が出土した。

第2地點 泉大津市豐中 964-1 (第7図)

造構存在の確認調査を実施したところ、ピットや竪穴住居跡の一部と思われる造構や、遺物(A～C)を検出したため、調査範囲を拡張した。面積は755.76m²である。

層序

耕土(20cm)の下には床土は認められず、造構の存在する黄色粘質土の面が見られた。全体に西の方へ行くに従って低くなっている。旧地形の斜面を表わしている。

造構

検出した造構の多くは古墳時代に属するものであるが、堆積土・遺物より、中世もしくは近世と思われる造構も確認した。古墳時代と中・近世に分けて記述する。

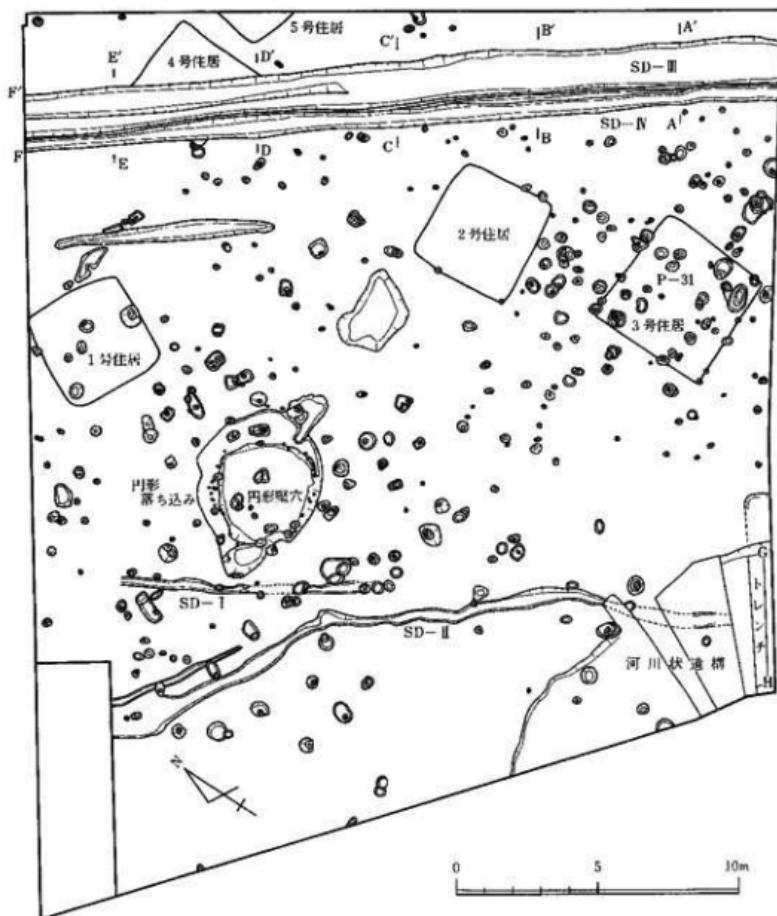
(1)古墳時代

この時代に属する造構として、竪穴住居・溝・円形落ち込み・円形整穴・不定形落ち込み・ピットなどがあげられる。

竪穴住居

5軒検出したが、全体のプランが明らかなもの4軒、一部だけのものが1軒で、1号住居～5号住居とした。

1号住居 (第8図) 調査地の西部に位置し、3.6m×3.8mの規模の方形プランを呈する。主軸はN25°Eである。壁の立ち上りは平均して10cm、壁面下には幅5cm、深さ3cm～5cmの規模の溝が廻り、東壁中央には70cm×60cm、深さ20cmの貯蔵穴が存在した。床面にはピットは見られるものの、中央部に3個、隅に1個と対称の位置にはなかった。堆積土は、上部で暗茶色土、下部で灰茶色砂質土となっていた。遺物は土師器で、堆積土中より叩き目を施したものと含む多数の破片、床面からは壺(4・5)などが検出された。



第7図 第2地点遺構図

2号住居 1号住居の東方約11mに位置し、 $3.7m \times 3.9m$ の規模で方形プランを呈する。主軸はN10°Wである。壁の立ち上りは約5cmで周溝は見られず、柱穴も検出されなかった。暗茶色土が全体に堆積していた。叩き目を施した土師器片が少量出土した。

3号住居 2号住居の東側に位置する。 $4.3m \times 4.3m$ の比較的大きい方形プランを呈する。主軸は南北方向である。後世の削平が激しく、壁の立ち上りは遺存せず、周溝がわずかに残っている。

た程度である。柱穴は対角線上にほぼ位置して4個確認でき、貯蔵穴は見られなかった。暗茶色土がわずかに堆積していた。床面に土師器壺(4・5)が検出され、北東部の柱穴に隣接するピット(P-31)より、土師器壺(20)と小型丸底壺(21)が出土した。この住居と関連する遺物かどうかは不明である。

4号住居 中世に掘削されたと思われる溝で切断されているが、3.3m×3.4mの規模の方形プランを呈するものである。主軸は南北方向で、壁の立ち上りは10cm、周溝・柱穴・貯蔵穴などは全く認められなかった。暗茶色土が全体に堆積していた。

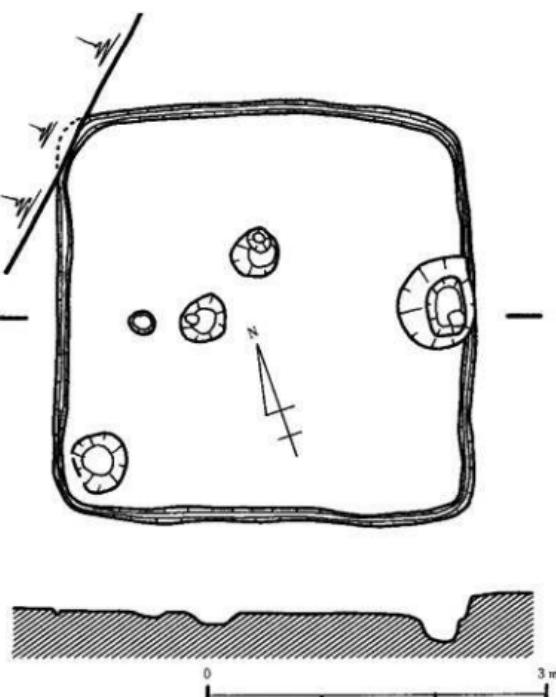
5号住居 4号住居に隣接する位置である。一部分の検出で、大半が調査地外であるため、その規模は不明である。方形のプランを呈すると思われ、主軸はN 2° Eである。壁の立ち上りは25cmと比較的良く残っており、幅5cm、深さ4cmの周溝が残っている。暗茶色土が堆積していた。遺物としては、叩き目を施した土師器片が少量検出したのみである。

溝

調査地の南西部で2条検出した。それぞれSD-I・SD-IIとした。

SD-I 南東から北西へ流れる、幅40cm、深さ3cm～10cmを測る規模の溝である。約9mの長さが確認できるだけで途切れている。暗茶色土が堆積していた。遺物としては、須恵器杯(6・7)のほか土師器の細片が少量出土したのみである。

SD-II SD-Iの南側を南東から北西の方向へ流れ、途中で西の方へ向きを変える。溝内には、南東部で茶色砂質土が、そして中程より北西部では暗茶色土



第8図 第2地点1号住居遺構図

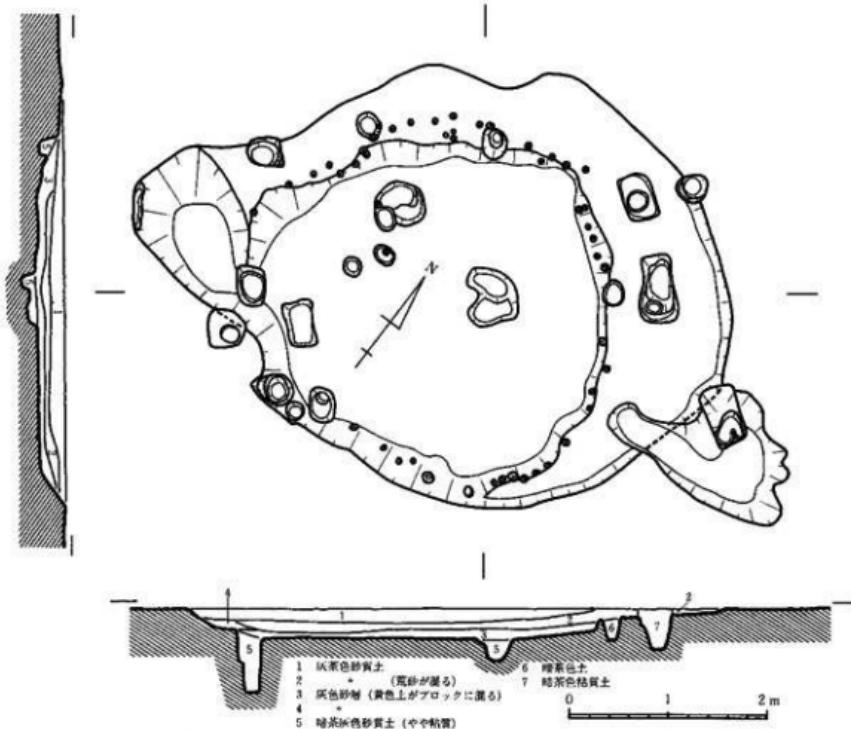
が堆積していた。遺物は、土師器壺（9・10・11）・須恵器杯身（8）などが出土した。

円形落ち込み

SD-I の北側に位置する。規模は $4.7m \times 5m$ のほぼ円形を呈し、深さは 10cm を測る。暗茶色土の堆積土がみられた。遺物は、土師器壺（15）・高杯・須恵器杯蓋（12）・高杯（13）・把手付椀（14）・器台（16）などが破片で出土した。

円形豊穴（第 9 図）

円形落ち込みの下部で検出された。規模は $3.5m \times 3.6m$ 、深さ 21cm を測る円形豊穴に、最大幅 1.5m 、長さ 1.5m の舌状の張り出し部を有する造構である。周開には直径 8cm 位の小穴が 40 数個穿たれており、その間隔は一定ではなかった。これらの小穴は垂直に空けられておらず、いずれも円形豊穴の中心部上方を向いていた。床面には、直径約 50cm 、深さ 30cm のピットと直径 60cm 、



第 9 図 第 2 地点円形豊穴遺構図

深さ10cmのビットが確認された。堆積土は上層が茶灰色砂質土、下層は灰色粘質土が薄くみられた。遺物は土師器留式甕・壺・高杯などの破片が出土した。

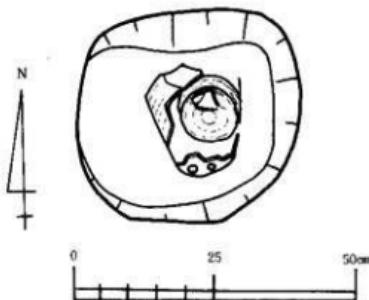
不定形落ち込み

円形落ち込みに重なる造構で、規模は1.2m ×1.9m、深さ20cmを測る。暗茶色土が堆積しており、遺物は土師器片（17～19）が少量出土した。

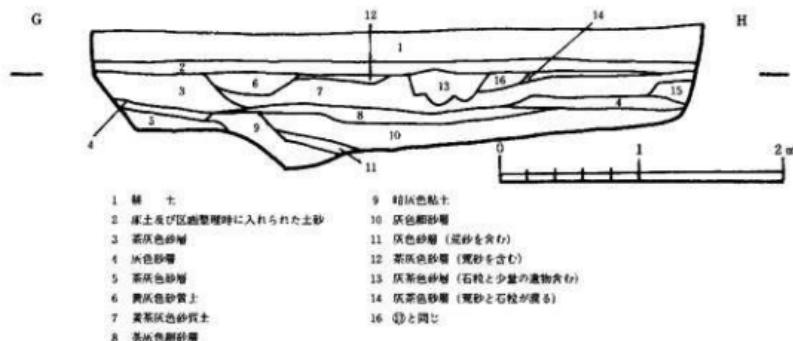
ビット

検出したビットは200個をこえ、規模は10cm～50cm、深さ5cm～50cmと様々であり、建物を復元することはできなかった。なおP-31から（20・21）、P-27から（23）、P-56から（22）の遺物が発見された。

以上古墳時代に属する各造構について記述してきたが、これらの造構面の下に、更に古墳時代に属する河川状造構の存在することが、トレンチ調査で判明した。それによると、SD-IIの南東部から北西方向への流路であるが、規模は不明であった。北側の肩部すなわち右岸から、ほぼ垂直に1m程下りて、平坦であるがやや南西方向に傾斜している底部に至る。堆積土は灰茶色砂質土であった。造構は、土師器壺（29・31）・高杯（30）・大形鉢（32）などが出土した。



第10図 第2地点ビット31出土状態



第11図 第2地点河川状造構断面図

(2) 中・近世

この時期に属する造構として2条の溝がある。ともに平行して、南東から北西の方向に流れ、4号住居を切斷する。SD-III・SD-IVとした。

SD-III 幅90cm~1.6m、深さ10cm~20cmを測る。底部の平坦な溝である。南東部で浅く、北西部に行くにしたがって深くなっている。中央部から北西側にかけて、底部に5cm大の川原石が數かれていた。堆積土は灰色砂質土であったが、上部には耕土が薄く覆っていた。これは土地区分整理時（昭和47年）まで溝として利用されていたことによる。遺物として、須恵器窯（24）・陶磁器（25~27）・瓦製円盤（28）の他に、土師質小皿・瓦質羽釜・備前焼の破片などがある。

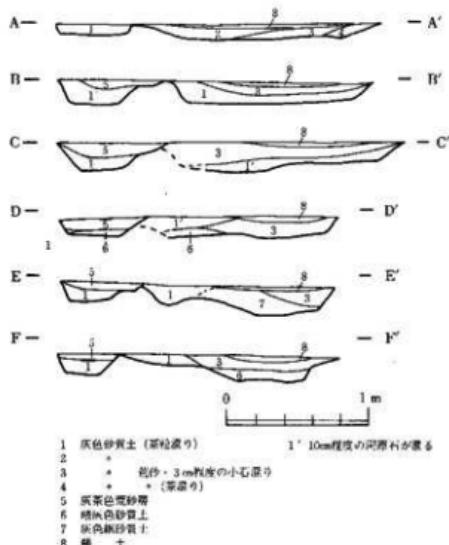
SD-IV SD-IIIの南肩部すなわち左岸に重複しているため本来の規模は不明であるが、現存値は幅45cm~60cm、深さ10cm~20cmを測る。堆積土は灰色砂質土である。遺物は、瓦器・瓦・瓦質小皿・陶磁器・須恵器などの破片が出土した。

遺物 (第13・14図)

土師器 (4・5・9~11・15・17~22・29~32)

壺 (4・5・32) (4)は口縁部がまっすぐ外上方へのび、端部を丸くおさめた直口壺で、体部内面には粘土紐痕が残る。(5)は二重口縁を呈し、屈折部の外側は凸帯状に突きだし、球形で大型の体部を有する。(32)は短かい頸部と外反する口縁部の境に段を有し、口縁端部は丸く、ややふくらみをもつ。

甕 (9~11・29・31) (9)の口縁端部は内傾する面を有し、内側に稜をもつ。(10・11)は短かい口縁部で、(10)は厚くて外済し端部を丸くおさめ、(11)は薄くて外反し平坦な端面を外側につくる。体部はいずれも球形である。(29)は頸部でややしまる長手丸底の体部に、外済気味の小さな口縁が付き、端部は外側に傾斜した平坦な面をもつ。(31)は布留式で、頸部は



第12図 第2地点SD-III~VI断面図

外反し、端部は内傾する面で稜をもつ。

瓶 (15・20) 底部は平底を呈するが、(15)は中心部で少しくぼむ。やや大きめの孔を中心には、(15)は8個、(20)は推定6個の孔を周囲に配する。脚部は、底部より内湾気味に立ちあがり、中位で2個の把手が付く。(15)はそれより上位は直立し、口縁部は外上方にひらく。

甕 (17) 短かく外上方へのび、直口に張りの弱い体部がつく、最大径は口縁部にある。

鉢 (18・19) (18)は平底で厚く、体部は内湾しながら、口縁部で薄く尖らせておわる。

(19)は台付鉢で、底部と脚部の境に指圧痕が認められ、脚部の大きさひろがる底い脚台をもつ。

小型丸底壺 (21) 球形の体部に、外上方へわずかにひらく口縁部を有し、端部は丸い。

高杯 (22・30) (22)は杯底部から口縁部がゆるやかに外上方へまっすぐのび、端部は丸い。

(30)の口縁部は内湾して、端部は平坦な面を有する。いずれも脚部は欠失している。

須恵器 (6~8・12~14・16・23・24・A~C)

杯蓋 (6・7・12・23・A~C) (A)は天井部が比較的半らに近く、明確な沈線が巡り、口縁部は外反して高く、端部は丸味をもつ。(23)はやや丸味をもつ天井部で、わずかに稜がみられ、口縁部は外下方にまっすぐのび、端部が尖る。(A)はI型式3段階、(23)はI型式4段階である。^⑩(7)の天井部もやや丸味をもつが、稜は形骸化し、沈線が一条巡り、口縁端部は平坦で、内傾している。II型式2段階。(C)は高杯の蓋で天井部は丸く、稜が巡り、口縁部はやや外反して、端面は凹面となっている。(12)も高杯の蓋と思われる。稜は形骸化して段状をなし、その下に沈線が巡る。(B)は全体に丸味をおび、稜は完全に退化しており、口縁端部は丸味をもつ。(C)はI型式4段階、(12)はII型式、(B)はII型式3段階である。

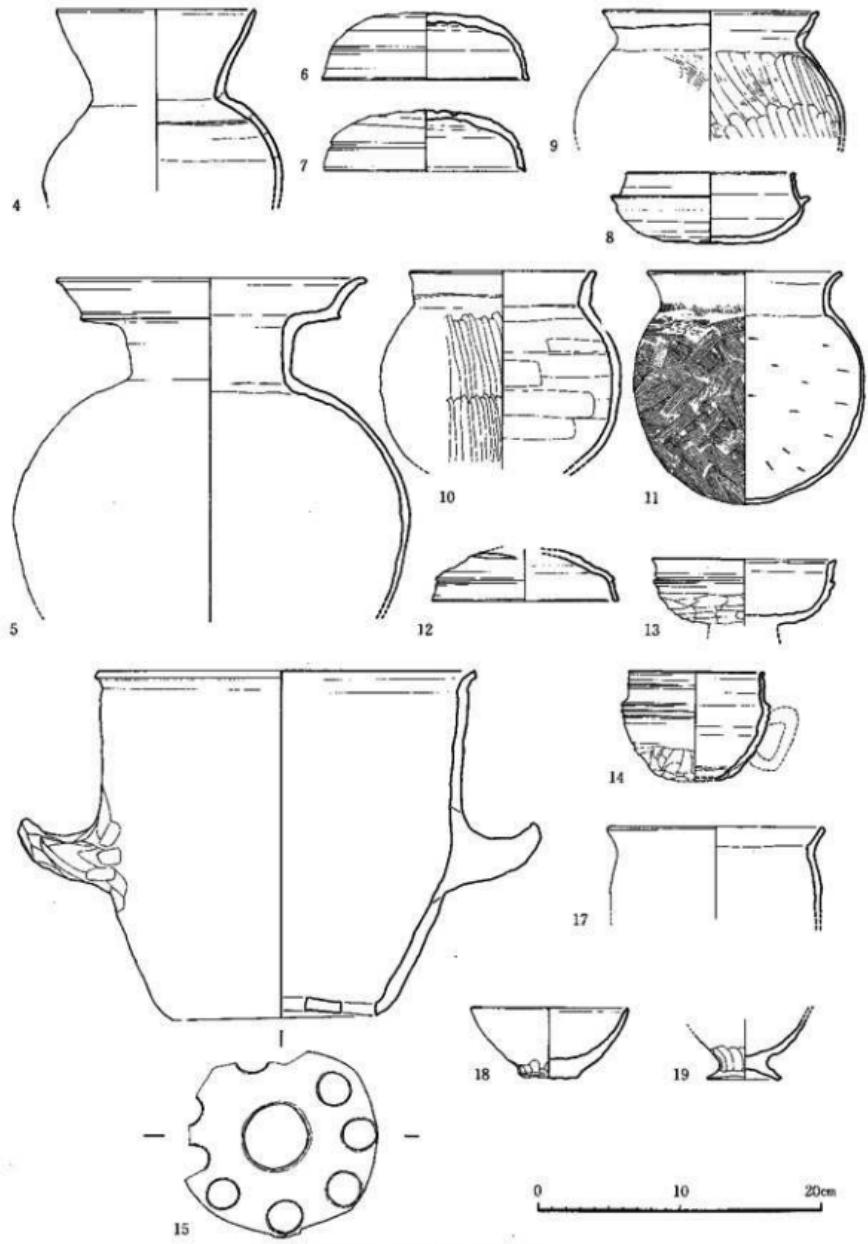
杯身 (8) たちあがりは比較的高くて内傾し、端部は丸味をもつ。受部はやや上方を向き、短かく端部は丸い。底部は丸味をもつが、中心部はやや平らである。I型式5段階である。

高杯 (13) 無蓋高杯で、脚部は欠損している。杯部は深く、口縁部はまっすぐ立ちあがり、端部は内傾する平坦な面をもつ。稜を有し、その上に沈線が巡る。I型式4段階である。

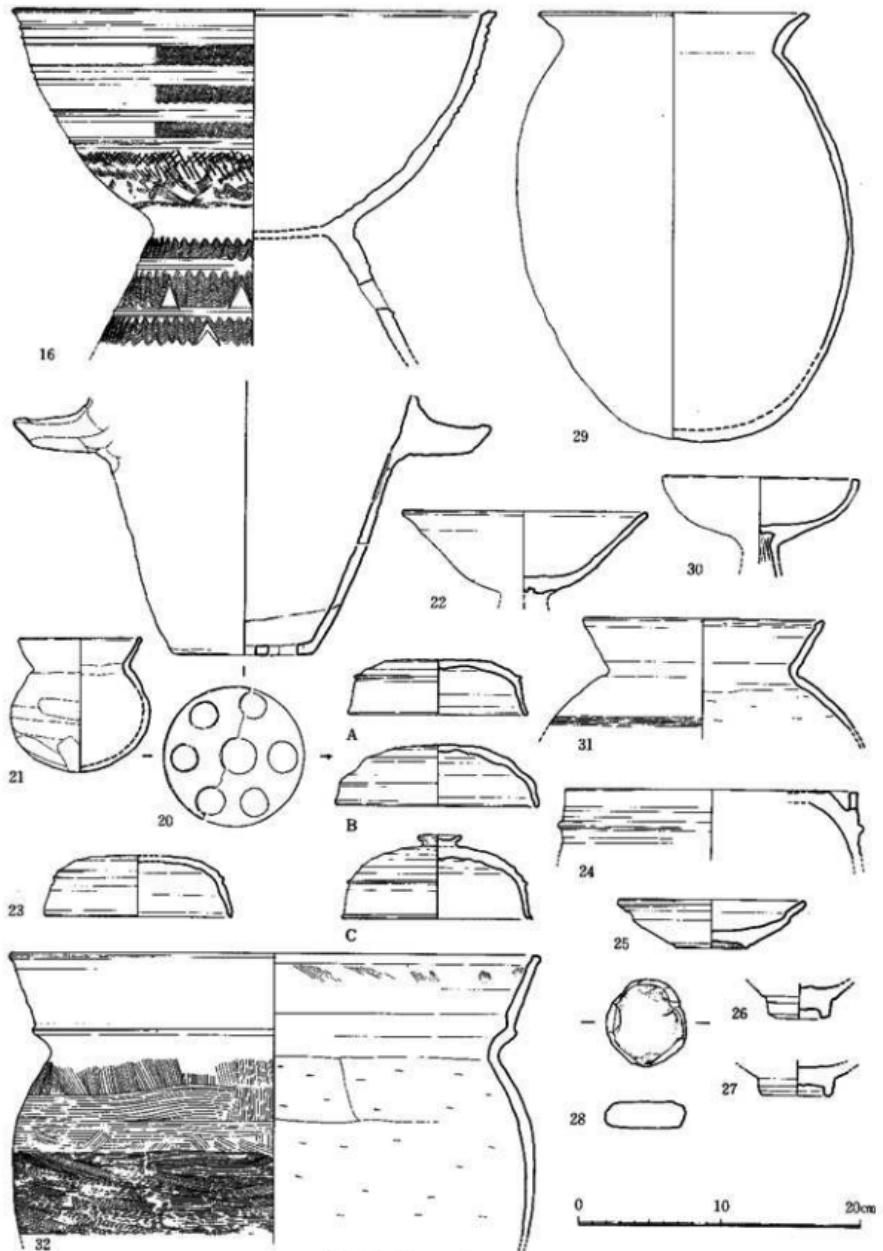
把手付椀 (14) 口縁部は直立し端部は丸い。体部は内湾し、口縁部との境付近に2条の凹線が巡る。把手部は欠失しており痕跡がみられる。I型式3段階である。

器台 (16) 台部は深く、ゆるやかに内湾して立ちあがり、端部は平坦な面をもつ。体部は2本~3本の凹線を巡らせて4つに区切り、波状文を配し、底部には櫛描文を施す。脚部の基部は太く、まっすぐ外下方へひろがる。波状文を施し、三角形の透窓が穿たれている。古様を呈している。

硯 (24) 四面鏡で、海部の傾斜はするどく、周縁は垂直に立ち、高さは陸部とほぼ同じで、端部は平坦。脚部は欠損のため不明であり、その上部には隆線が1条巡る。



第13図 第2地点出土遺物



第14図 第2地点出土遺物

陶磁器 (25~27)

椀 (25~27) (25) は底部を削ることによって、断面三角形の小さな高台をつくり出している。底部よりまっすぐ外上方へのび、一段屈曲させてさらにのび、端部は丸くおさめる。(26・27) は高台部分のみである。

瓦製品 (28)

用途不明 瓦を打ち欠いて丸く円盤状にしたものである。使用は不明であるが、過去の調査でも5点出土している。祭祀用か、子どもの遊具かと思われる。 (坂口・佐藤)

第4章 まとめ

第1地点—1で発見した堅穴住居は古墳時代前期に属するものである。豊中遺跡では、この時期に属する堅穴住居が多数発見されており、集落の構造を探る手掛かりを与えてくれる。この地点で顯著なのは、溝が多く見られるということである。流路方向は様々であるが、概して北方向のものが多い。これは後世の条里の方向とは異なるものであり、それ以前に掘削されたものであろう。

この地点より南西方向、すなわち第2地点へ行くにしたがって、遺構の存する密度が濃くなつておらず、一つの群を形成しているようである。

第2地点は最も遺構の多い部分で、堅穴住居が著しく目立つ。いずれも古墳時代前期に属するものと思われる。ここで特異なのは、円形堅穴である。やはり古墳時代前期の遺構と思われるが、円形プランを呈するのはこの一例のみである。一般的な住居は全て方形プランであることから、この円形堅穴は住居とするよりも、他の目的を持つ建物であったと考えたい。それは、この地点で発見された堅穴住居の面積を比較してみると、1号住居13.7m²、2号住居14.4m²、3号住居18.5m²、4号住居11.2m²で円形堅穴は9.9m²と狭く、更に円形の方は方形より生活空間が狭くなると考えられることも一つの理由にあげられる。舌状に張り出した部分は、出入口にあたり、周囲の小穴には木が配せられていたと考えられる。この遺構の上部に存する円形落ち込みは、円形堅穴建物が廃棄になり、自然に埋れてゆく過程において、水の流れ込みにより土が削られて、できあがったもので、完全に埋もれた時期は5世紀の中頃であろう。

(坂口)

(参考文献)

- ① 「和泉市史」 第1巻 和泉市史編纂委員会 1965・10
- ② 「大池遺跡発掘調査概要」 高石市教育委員会 1977・3
- ③ 「豊中・古池遺跡発掘調査概要 そのⅢ」 豊中・古池遺跡調査会 1976・3
- ④ 「池上遺跡・第2分冊土器編」 大阪文化財センター 1979・3
- ⑤ 「池上遺跡発掘調査概要Ⅴ」 大阪府教育委員会 1975・3
- ⑥ 「泉大津市東森遺跡見学会資料」 豊中・古池遺跡調査会 1977・6
- ⑦ 「豊中遺跡発掘調査概要Ⅲ」 泉大津市教育委員会 1979・3
- ⑧ 「豊中遺跡発掘調査概要Ⅳ」 泉大津市教育委員会 1978・3
- ⑨ ⑦と同じ
- ⑩ 「陶邑Ⅱ(大阪府文化財調査報告書第29輯)」 大阪府教育委員会 1977 の編年による。

遺物観察表

土器

No.	法 規 口 径 器 高	調 整	胎 土 ・ 色 調	備 考	
1		口縁部内外面横ナゲ調整。 脚部外面はヘラ削りで内面はヘラナ ゲ調整。 肩部内面は指圧痕。	精良な粘土使用。 外面-赤茶色 内面-灰白色	文様は額部に凸巻をめぐらし、円形浮文を貼り付ける。 複合口縁の壺 布留式土器	
2	9.3cm	11.5cm	外面は擦・擦の細かい刷毛目。 内面は剥離のため調整不明。	2mm程度の砂粒多く含む。 灰茶色	小型丸底壺 布留式土器
3	8.8cm	9.5cm	外面は刷毛目が荒く施される。 体部内面はヘラ削り。	精良な粘土を使用。 2mm程度の砂粒少量含む。 灰白色	小型丸底壺 布留式土器
4	14.1cm	—	剥離のため調整不明。	多くの砂粒を含む。 灰茶色	壺
5	21.9cm	—	剥離のため調整不明。	砂粒を多く含む。 茶色	複合口縁の壺

須恵器

No.	法 規 口 径 器 高	調 整	胎 土 ・ 色 調	備 考	
6	14.5cm	4.8cm	天井部外面にヘラ削りが施される以 外は全て横ナゲ調整。	1~2mm程度の砂粒を含む。 灰褐色	杯蓋
7	14.2cm	4.3cm	同 上	2mm程度の砂粒を含む。 灰色	杯蓋
8	12cm	5cm	底部外底にヘラ削りが施される以外 は横ナゲ調整。	同 上	杯身

土器

No.	法 規 口 径 器 高	調 整	胎 土 ・ 色 調	備 考	
9	15.2cm	—	口縁部は横ナゲ調整。 脚部は削毛目。 内面は擦のヘラナゲ。	やや粗い砂粒を含む。 赤茶色	壺
10	13.4cm	—	口縁部は横ナゲ調整。 脚部は擦のヘラナゲ。 内面は横のヘラ削り。	砂粒を多く含む。 暗茶色	壺
11	13.8cm	16.6cm	口縁部は横ナゲ調整。 脚部は削毛目。 内面はヘラ削り。	精良な粘土であるが2mm 程度の砂粒を含む。 暗茶色	壺

須恵器

No.	法 規 口 径 器 高	調 整	胎 土 ・ 色 調	備 考	
12	13.2cm	—	天井部ヘラ削り。 内面横ナゲ。	精良な粘土。 外底-暗緑色の釉 内面-灰色	杯蓋 天井部にヘラ記号。

No	法 口 径	量 器 高	調 整	胎 土 ・ 色 調	備 考
13	5cm	—	杯底部はヘラ削りでそれ以外は横ナ ゲ。	精良な粘土。 灰色	高杯 脚部欠損
14	9.4cm	7.8cm	底部は手持ちヘラ削りそれ以外は横 ナゲ。 内底部に指圧痕。	精良な粘土、砂粒を少し 含む。 灰色	把手付樹 把手欠損

土篩器

No	法 口 径	量 器 高	調 整	胎 土 ・ 色 調	備 考
15	29cm	24.4cm	内外面とも剥離のため調整不明。	2mm程度の砂粒を含む。 茶灰色	底部に1個の孔を中心に 8個の孔。 無

須恵器

No	法 口 径	量 器 高	調 整	胎 土 ・ 色 調	備 考
16	34.3cm	—	杯部外側は横ナゲが強され、回線及 び波状文が巡る。	精良な粘土。 外側 暗灰色 内側一體	脚部に三角形の透窓を半 島状に穿孔。 器台

土篩器

No	法 口 径	量 器 高	調 整	胎 土 ・ 色 調	備 考
17	15.4cm	—	外面は剥離のため調整不明。 内面はヘラ削り痕。	2mm程度の砂粒多く含む。 黄灰色	表
18	11.2cm	5cm	外面底部近くに指圧痕が認められる 以外、剥離のため調整不明。	精良な粘土。 茶白色	鉢
19	5.2cm (台部径)	1.5cm (台部高)	底部は横ナゲ調整。 台部に指圧痕。	精良な粘土であるが1mm 程度の砂粒を含む。 外側 黄茶色	台付鉢
20	—	—	器壁は全体に剥離しており調整は不 明。 内面底部近くに難日が認められる。	砂粒の多い粘土使用。 茶色	底部に1個の孔を中心には 定5個の孔。 鉢
21	8.8cm	9.5cm	体部の上部から口頭にかけての内外 側部下部の外側は横のヘラナゲ調整 内部は瓶のヘラ削り。	精良な粘土使用。 茶白色	小型丸底壺
22	17.4cm	—	杯部内外とも剥離のため調整不明。 れる。	1mm程度の砂粒多く含ま れ。	高杯 脚部欠損

須恵器

23	13.4cm	4.3cm(復)	天井部は回転ヘラ削りそれ以外は横 ナゲ調整。	精良な粘土使用。 灰色	杯蓋
24	21cm(復)	—	一部横ナゲ調整が認められるが剥離 のため調整不明。	精良な粘土使用。 灰色	円筒瓶

陶磁器

No	法 量				調 整	胎 土・色 調	備 考
	口徑	器高	高台径	高台高			
25	13.2cm (復)	3.4cm	5cm	0.4cm	底部はヘラ削り。 体部下半部は横ナナゲ調整。 体部上半部及び内面は釉のため調整不明。	横直な粘土使用。 釉-灰白色 地肌-茶灰色	機
26	-	-	4.2cm (復)	0.7cm	高台はヘラ削り。	横直な粘土使用。 釉-綠色・茶色 地肌-灰色	体部外面及び内面は釉がかかる。 機
27	-	-	5cm	0.7cm	高台及び内底面はヘラ削り。	横直な粘土使用。 釉-灰綠色 地肌-灰色	機

瓦製品

No	法 量		調 整	胎 土・色 調	備 考
	直 径	高 さ			
28	長径6.1cm 短径5.6cm	1.9cm	平瓦片を丸く打ち欠いたもの。	砂粒の多い粘土使用。 灰茶色	祭祀用(実線)あるいは子供の遊具か。

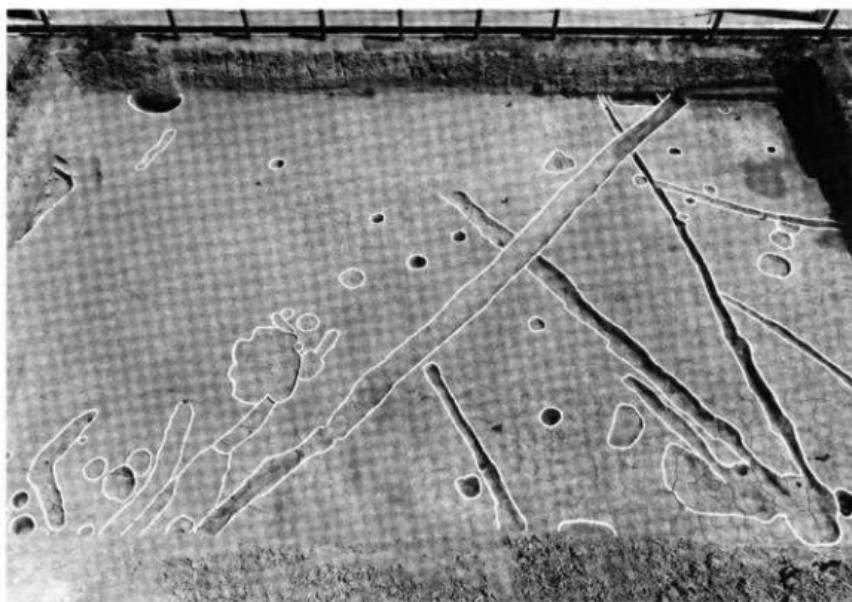
土器

No	法 量		調 整	胎 土・色 調	備 考
	口 徑	高 さ			
29	19cm (復)	30.5cm	口縁部は内外面とも横ナナゲ調整。 脚部もナナゲのようであるが剥離のため不明。	砂粒の多い粘土使用。 茶灰色	變
30	13.8cm (復)	-	剥離のため不明。	砂粒の多い粘土使用。 赤茶色	高杯 2次焼成を受けている。
31	16.9cm (復)	-	口縁部内外面は横ナナゲ調整。 脚部以外に縦・横方向の刷毛目。 内面は横ヘラ削り。	砂粒の多い粘土使用。 茶色	布留式上器
32	37.6cm (復)	-	口縁部外面は横ナナゲ調整、内面に刷毛目が残る。 脚部外面は縦・横方向の刷毛目内面は横ヘラ削り。	砂粒の多い粘土使用。 茶灰色	壺

須恵器

No	法 量		調 整	胎 土・色 調	備 考
	口 徑	器 高			
A	12.7cm (復)	3.9cm	天井部は回転ヘラ削り。 他は横ナナゲ調整。	少量の砂粒を含む粘土使 用。 灰色	杯蓋
B	14.4cm (復)	4.3cm	天井部は回転ヘラ削り。 他は横ナナゲ調整。	少量の砂粒を含む粘土使 用。 灰色	杯蓋
C	13.3cm (復)	5.9cm	天井部は回転ヘラ削り。 つまみ部分とその周辺、口縁部及び内面は横ナナゲ調整。	少紫の砂粒を含む粘土使 用。 灰色	杯蓋(高杯用)

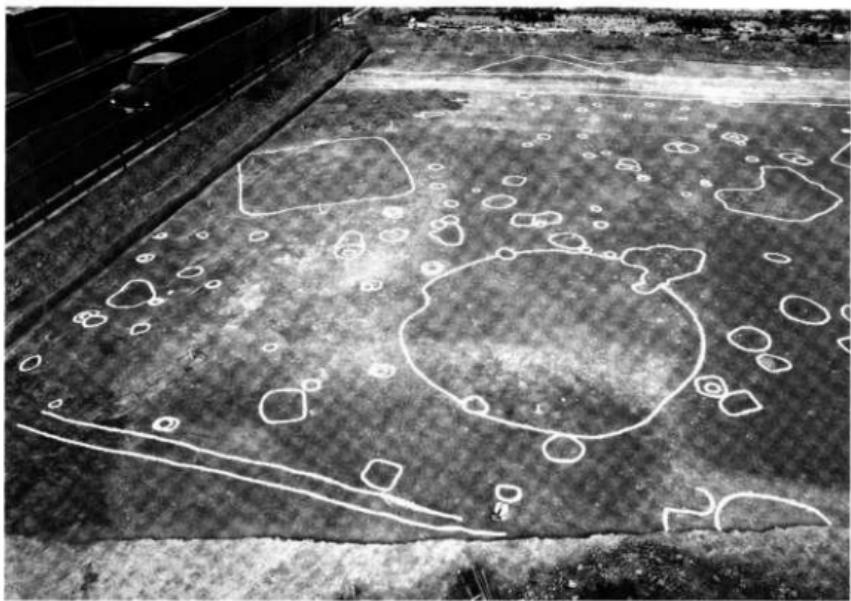
図版



第1地点—1 全景



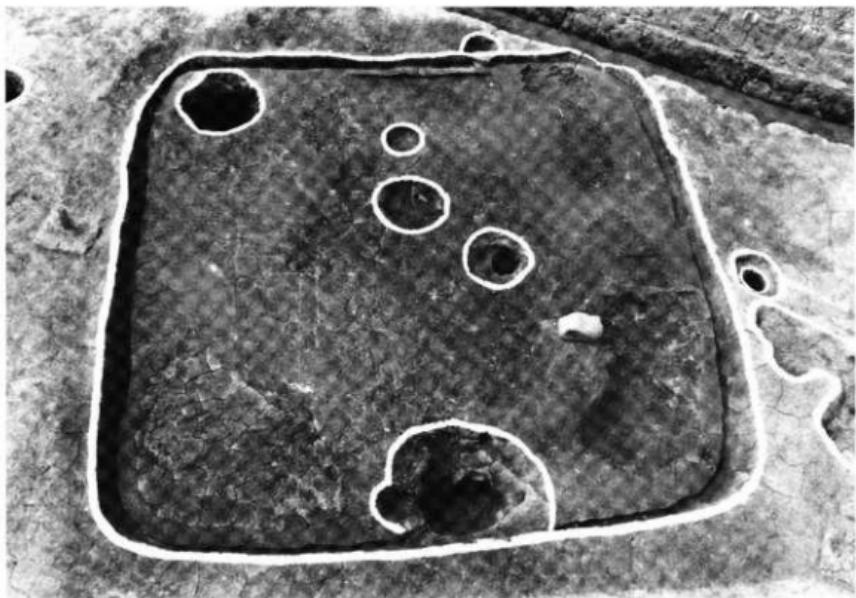
第1地点—1 竖穴住居



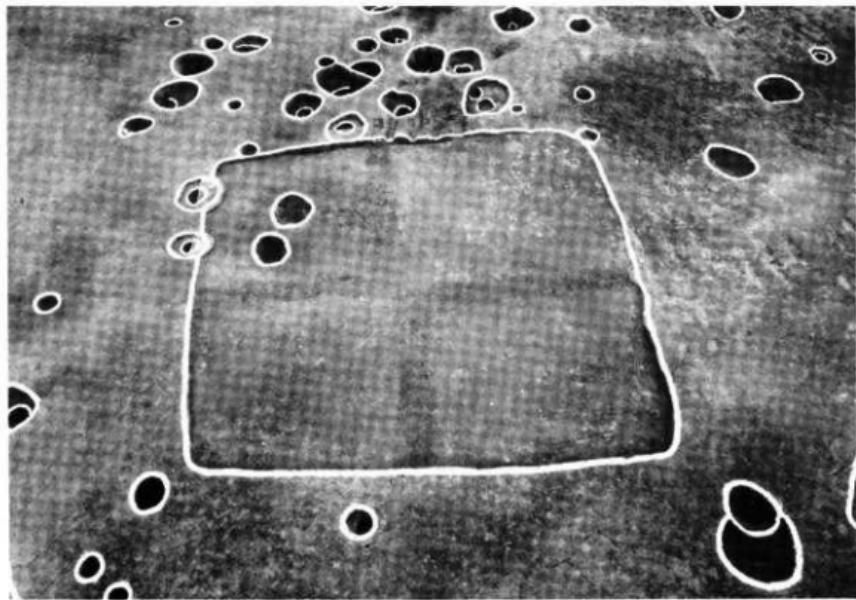
第2地点 全景南西より



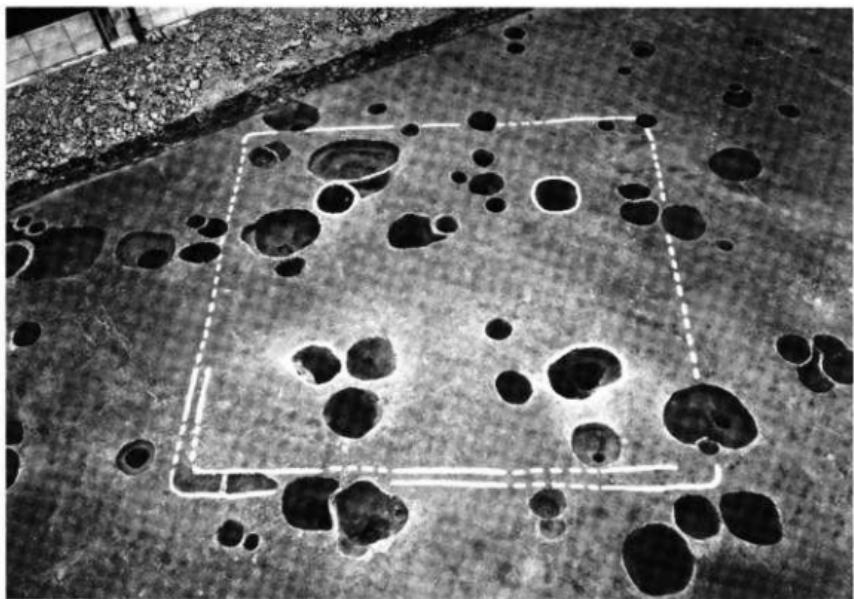
第2地点 全景南西より



第2地点 1号住居東より



第2地点 2号住居北より



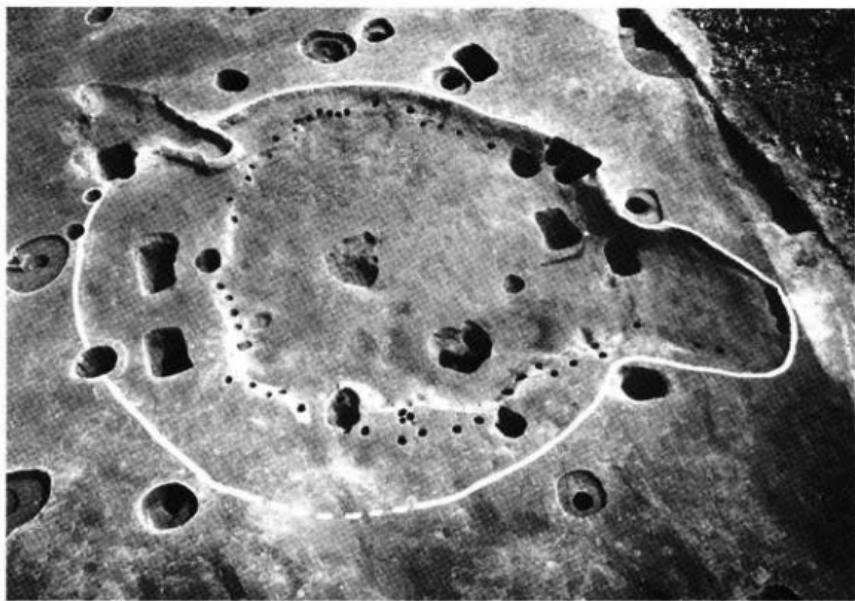
第2地点 3号住居北より



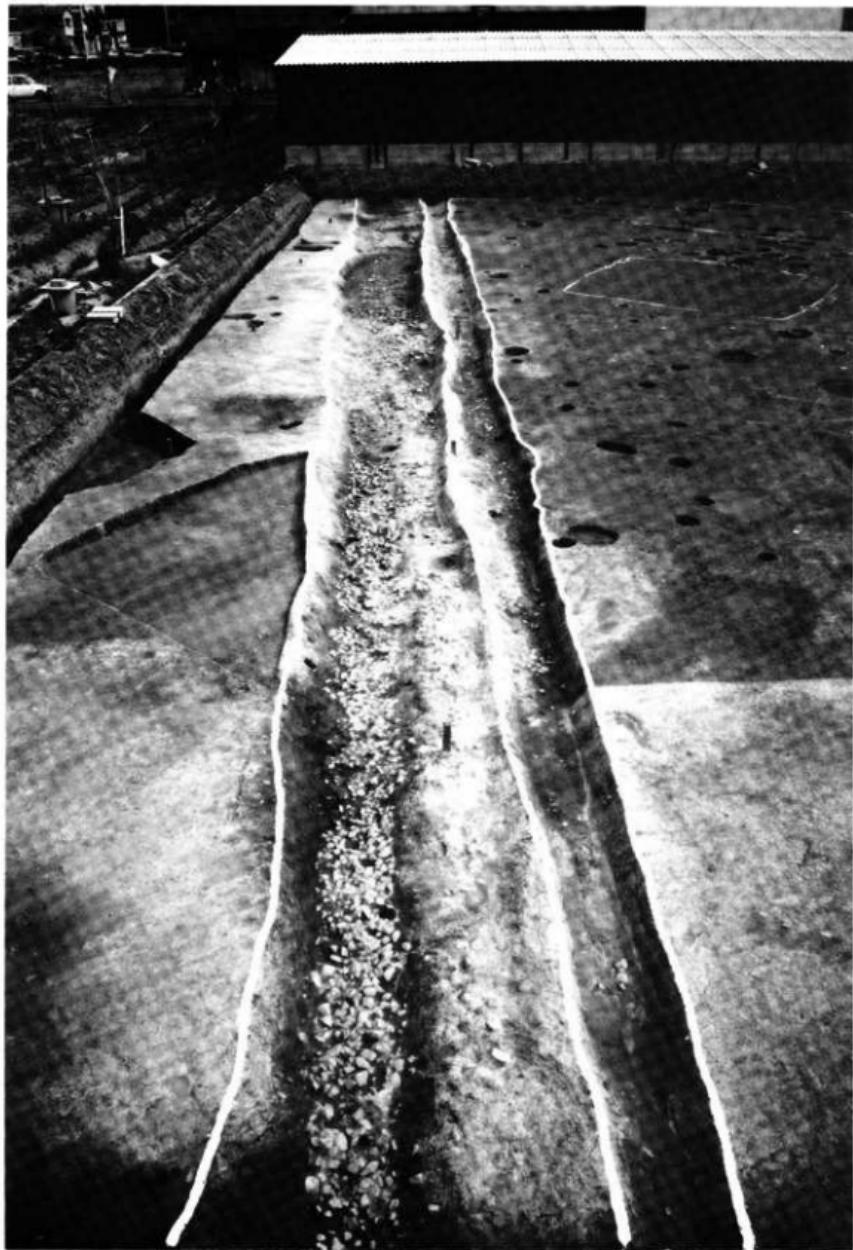
第2地点 4.5号住居東より



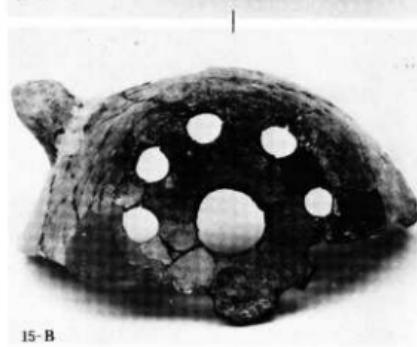
第2地点 円形竪穴東より



第2地点 円形竪穴北西より



第2地点 中世溝北西より



泉大津市文化財調査概要5
豊中遺跡発掘調査概要IV

1980年3月

発行 泉大津市教育委員会
編集 社会教育課
泉大津市東雲町9番12号
印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号

